

(9) 八束小学校

学 校 長 益永 美佳
校内研究代表者 浦田 奈々

1. 研究主題

「自ら学ぶ みんなで学ぶ
～課題に粘り強く取り組み、考えを伝え合うことを通して～」

2. 主題設定の理由

昨年度は、高知県学校安全総合支援事業の拠点校の指定を受け、研究主題を「しっかり聞き、自ら判断し、伝え合える子」と設定し、児童一人ひとりがより自分事として防災や減災について考えることができる防災教育の再構築と、保護者や地域への啓発の改善に取り組んできた。その中で、教科等横断的で探究的な授業実践を通して、人の話を静かに最後まで聞くことの徹底や主体的で対話的に学ぶ児童の育成を目指した授業づくりにも取り組んできた。

その結果、子どもたちは、八束の地域の人たちの命を守るために自分たちにできることは何かを深く考え、主体的に学びに向かう姿が見られるようになった。

しかしながら、昨年度の反省として、とも学びの際に教師が介入し過ぎたり、理解できている児童の説明だけで授業を進めたり、自力解決の際に最後まであきらめずに粘り強く取り組むことができない児童が一定数いたりすることが課題として挙げられた。また、令和5年度高知県学力定着状況調査の結果において、算数の平均正答率が高知県の平均正答率と比べて4年が-7.5、5年は-16.8と大変厳しい結果となった。

そこで、本年度は、昨年度の研究を基盤として保護者や地域と一体となった防災教育の推進に取り組むとともに、各種学力調査において課題が見られる算数科を中心に授業改善の研究に取り組むこととした。そのため、研究主題を「自ら学ぶ みんなで学ぶ～課題に粘り強く取り組み、考えを伝え合うことを通して～」と刷新し、ICTを最大限に活用した個別最適な学びと全員で関わり合いながら学習を深める協働的な学びを実現していく。

特に、研究教科の算数では、最初に学習の流れや時刻を提示して児童に見通しをもたせ、導入では前時との共通点や違いを明らかにしながら問いを引き出し「めあて」を設定することを全学年で統一して行う。その後、ひとり学びでは、家庭学習で行ってきた予習やクラウドに保存した既習の足跡(板書の写真や公式、算数用語等)を手掛かりに、既習の見方・考え方を働かせながら自力解決を行い、その際に、思考の過程や結果を各学年に応じた数学的活動(言葉・具体物、図、数直線、表、グラフ、式等)で表現させることを徹底していきたい。また、とも学びでは、ロイロノートなどのICTを活用して、個々の考えを共有しながら更に良い考えを導き出し、意味理解を確かなものにしていく。授業の終わりには、本時で育てる資質・能力に合った適用問題に取り組ませたり、ふり返りスタンダードに基づく学びの振り返りを行ったりすることで学習内容の定着を図っていきたい。小規模校の良さを生かして一人ひとりの強みや弱みを把握し、また、同学年や異学年で学び合うことを大切にしながら、個を鍛え、褒めて伸ばし、知・徳・体のバランスの取れた児童の育成を目指す。

3. 研究の進め方と方法

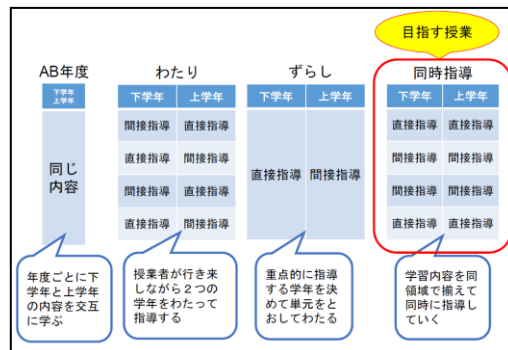
(1) 研究仮説

算数科の学習において、次のような手立てや指導の工夫を行うことにより「自ら学ぶ みんなで学ぶ～課題に粘り強く取り組み、考えを伝え合うことを通して～」を達成することができるだろう。

- ①主体的に学習活動に取り組めるよう、問題や既習の見方・考え方から問いを引き出し、めあてを設定する。
- ②思考の過程や結果を言葉や具体物、図、表、式などを用いて表現させる。その際に予習や ICT を効果的に活用させる。
- ③本時で育てる資質・能力に合った適用問題に取り組ませたり、学びのふり返りを行ったりする。

(2) 研究の取組

複式教育の研究をするにあたって、年度当初に全教職員で「複式のよさ」と「目指す授業の姿」について話し合いを行った。本校で考えた複式教育の強みは①異学年で学ぶ合うことで、学びの連続性・関連性が見えること②主体的で協働的な学びの力が身につくということである。また、複式・単式に限らず、これから目指すべき授業の姿は、クラウドや一人一台端末を活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現していく「複線型」の授業であることから、複式の強みを最大限に生かしつつ複線型の授業を目指しすることとした。そのためには、従来の「わたり」の授業スタイルよりも、学習内容を領域で揃えて指導する「同時指導」の授業スタイルの方が、より適しているのではないかと考え、4月に複式学級については、カリキュラムの見直しを行った。



あることから、複式の強みを最大限に生かしつつ複線型の授業を目指しすることとした。そのためには、従来の「わたり」の授業スタイルよりも、学習内容を領域で揃えて指導する「同時指導」の授業スタイルの方が、より適しているのではないかと考え、4月に複式学級については、カリキュラムの見直しを行った。

7月には、文部科学省国立教育政策研究所の笠井健一調査官をお招きし、3年生「わり算」、4年生「わり算の筆算」の同時導入の授業に挑戦した。導入では、前時の問題との違いや両学年に提示された問題の相違点を明らかにし、その後、それぞれの学年に分かれて、どのような既習が使えるかそうか話し合いながら、児童の言葉で「めあて」を設定し、問題解決に取り組む授業展開とした。3年生は一人学びの場面で、思考の過程をタブレットの複製機能を使って表す児童もいれば、ノートに図を書いて考えを整理した後にカメラで撮影して友達と共有する児童もいて、お互いの考えを参考にしながら個に応じた学習方法で問題解決をしていく姿が見られ、複線型の授業の形が少し見えていた。4年生は、とも学びを中心に授業が展開した。お互いの考えをすり合わせて、1つの考えに集約していく姿が見られ、4年生にとっての個別最適な学習となっていた。しかしながら、児童自身が、「めあて」をたて、「まとめ」ることを重視しすぎるあまりに、見方・考え方が明確でない「めあて」となり、「まとめ」も「めあて」との整合性がないものになってしまったという課題が見られた。このことは、事後研でも協議の中心となり、講師の笠井健一調査官からは、「めあて」や「まとめ」をつくるために必要な知識やスキルが児童に十分身につけていないため、今の授業スタイルを続けても、学力向上には繋がらないことを指摘された。また、本校児童の実態に合った指導方法として、まずは教師と共に学び方を学び、次に類似問題を子ども同士で説明しながら解かせ、最後に一人で適用問題を行う授業スタイルを提案していただいた。

そこで、夏休みに年度当初の授業スタンダードを大幅に見直し、児童が教師と学ぶ、まねて学ぶ、一人で学ぶという授業を、複式に関わらず、全ての学級で実践していくことを確認した。併せて、学習リーダーの手引きも改訂し、「まねて学ぶ」場に、子ども同士が見方や考え方を引き出すやり取りを加えた。更に、複式の指導方法についても見直し、基本に戻って従来型の「わたり」の授業スタイルで先程の新しい授業スタンダードを実践し、定着させた後に1時間の中での「わたり」から、単元全体を見通して、重点的に指導する学年の時間を決める「ずらし」に取り組み、少しずつステップアップさせて理想の授業に近づけることにした。

【改訂版】ハ小小スタンダード（教師用）

導入 (15分)	1 問題提起：直接指導 (1) 既習の確認 (2) 問いを引き出す (3) めあての設定 (4) 全体指導	これまでの学習・経験、前時との関連を確認する。 (既習) → が使えないかな？ 問いや既習の見方・考え方を基にめあてを設定する。 めあてを明確にして「めあて」→「めあて」を明確にする。 ①問題提起を見守りながら、数直線等で表し、確認する。 ②既習（既習）と既習の間、数直線やタッピング ③結果を見守る（見守り） ④具体物や図、数直線等から立式する ⑤立式を提示（立式）問題文、数直線、図、数直線のタッピング ⑥立式の直しを確かめる（たしやめ）
展開 2 (15分)	2 類似問題の解決：（1）～（3）間接指導・（4）直接指導 (1) 類似問題の提示 (2) とま学び (3) お互い学び	導入の（1）～（3）を協働的に進める（一人一人） 導入の（4）を各自解決する ①学習を促す（学習） ②めあてを明確にして「めあて」→「めあて」を明確にする（めあての直しを確かめる） ③めあての直しを確かめる（たしやめ） ④めあての直しを確かめる（たしやめ） ⑤めあての直しを確かめる（たしやめ） ⑥めあての直しを確かめる（たしやめ）
3 (8分)	3 適用問題の解決：間接指導 (1) 適用問題の提示 (2) 問題提起を見守りながら、数直線等で表し、確認する (3) 答えを求め、確かめる	一人一人 ①めあてを明確にして「めあて」→「めあて」を明確にする（めあての直しを確かめる） ②めあての直しを確かめる（たしやめ） ③めあての直しを確かめる（たしやめ） ④めあての直しを確かめる（たしやめ） ⑤めあての直しを確かめる（たしやめ） ⑥めあての直しを確かめる（たしやめ）
総括 (7分)	4 まなめ：直接指導 (全体) めあてに対するまとめを行う 5 ふりかえり：間接指導 (個人) めあて（既習した見方・考え方）に対するふりかえりを行う → 分かったこと → できるようになったこと 等	

10 月に行った 1 年生の「かたちあそび」の授業では、新しい授業スタンダードに基づく授業展開はできたものの、類似問題のレベルを上げすぎてしまい、本時でねらっていた、「1 時間の中で繰り返し問題を解き、何度も説明することで、子どもたちの資質・能力を育成する」ことが十分にできなかった。授業後の協議では、学んだ方法を真似して解ける問題にすることや、「めあて」に基づいて、何を説明するのかを明確にしたうえで対話をさせること、教室に学びの足跡を掲示したり板書を残すなど、既習が生かせる手立てが必要であることなどの意見が出された。

11 月には、5 年生は「四角形と三角形の面積」、6 年生は「円の面積」で授業づくり講座を行った。複式授業として、単元を通して重点的に指導する学年を決め、直接指導をする学年を意図的に「ずらし」ていく授業に取り組んだ。本時では、6 年生中心に授業を進めていく展開とし、5 年生は、前時の授業を元に ICT を活用しながら自分たちで授業を進めるようにしたが、ポイントをおさえたり評価する場面では、意図的に「わたる」よう直接指導を入れることとした。間接指導時の児童には、既習を基にしながら、数学的な見方・考え方を働かせ、表現したいことを表現しやすい方法で友達と伝え合ったり、参考にしたりする姿が見られた。年度当初は問題に手がつかず、友達の意見を聞いているだけ、もしくは写すだけだった児童は、本時の終末の適用問題では、図形に書き込みをしていくことで三角形の高さ・底辺を自分で見出すことができていた。教師が、既習の見方・考え方を大事に、明確にして授業を行うことで児童も成長した見方・考え方を自覚するようになってきている姿が見られた。

4. 今年度の成果と課題

《成果》

- 授業において、3 学期には低学年ではとも学びの時に算数用語を使い、答えを導き出す姿が見えた。また、中学年では、根拠に基づいた説明を行い、友達の誤答の理由を全員で考える姿が見え、高学年では、教師と学んだことを活かしながら、児童同士で問題を解決していく協働的な学びができつつある。
- 12 月に行った学校評価アンケート「授業が分かる」の項目では、児童 92%、保護者 100%と、昨年を上回る肯定的評価を得た。児童も保護者も授業改善の成果を実感していることが伺える。
- 12 月に本校独自で行った標準学力調査（1～3・6 年実施）では、国語において全学年が目標値を上回り、学力に伸びが見られた。算数においては、学年が上がるにつれ内容が難しくなるものの、1・2・3 年生は目標値を上回り、学年相応の学力が見についていることがわかった。6 年生についても伸びは見られるものの、目標値を上回ることとはできず、伸ばしきれていない。

《課題》

- 2 学期に改訂した授業スタンダードが徹底されている学年では学力に伸びが見られるが、類似問題でのとも学びや適用問題での一人学びが十分でない学年は、各種学力調査において伸びが見られていない。また、振り返りの時間の確保と内容の質は、全学年が課題である。
- 教員の意識がまだ式と答えにあり、予習を基にした授業展開ができていない。立式や答えの根拠を説明することに重点を置いた授業への転換が必須である。

《改善策》

- ◇教師と児童のやり取りを描きながら教材研究を行い、本時に成長させる見方・考え方の質を高める。
- ◇既習の確認は、児童が分かっている問題で振り返り、類似問題は、教師と共に解決した問題の数値だけを変えた問題をとも学びさせる。
- ◇振り返りは、毎時間板書とともにタブレットに保存するようにする。振り返りの内容は、本時で何が、どのような方法でできるようになったかに絞る。そのためには、見方・考え方児童から引き出した問い、児童のつぶやきなどを黒板に残すようにし、児童に意識づける。